

運動会における幼稚園児の受容感の認知が その後の運動場面に与える影響について

小田 幹雄 長澤 靖夫

キーワード：幼児教育受容感運動会

Preschool children's acknowledgment of acceptance in athletic meetings and it's effect in
physical playing

Mikio Oda Yasuo Nagasawa

Abstract

This research aims to clarify preschool children's acknowledgment of acceptance in athletic meetings and its effect in physical play. Two groups of the elder preschool children divided by acceptance test were compared with the behavior evaluation observed by the preschool teachers before and after the athletic meeting.

An athletic meeting is a good opportunity for parents to see the children's growth and progress since their programs include daily physical activities and play. Children also get the sense of fulfillment in doing their best in their performance. It is noted that the children doing physical play more actively after the athletic meeting, realizing the people's recognition of their efforts.

In the period in which children can gain sense of capability with the feeling of being accepted, encouragement may be necessary to enhance the sense of acceptance in daily life as well as special occasions like athletic meetings. Based on this research, we further need to clarify the effect of assistance for children's feeling of acceptance in the daily life in the nursery.

Key words : preschool education acceptance athletic meetings

1. 緒言

文部科学省による調査¹⁾より、全国青少年の体力・運動能力の現状は昭和60年と比較すると、50m走、ソフトボール投げのそれぞれの項目において男女とも下回っていることが報告されている。これは小学生での比較で

はあるが、幼児の運動能力についても同様に低下傾向である。幼児の運動能力の実情については、東京教育大学心理学研究室の「幼児の運動能力調査」による全国調査が1966年、1973年、1986年、1997年、2002年と約10年間隔で行われているが、多数の項目において

1997年結果よりも2002年の結果²⁾³⁾が劣っているとの調査結果がでていいる。幼児期は運動遊びを通して身体の発達その他、知的発達や運動技能の発達が著しい時期であり、この時期の運動能力低下はその後の成長に障害をきたしかねない。

このような運動能力の低下の原因のひとつとして考えられるのが、生活環境の著しい変化である。

現代社会は、交通機関の発達や電化製品、電子機器の発達により、非常に高い利便性を手に入れることができた。その一方で、早期教育化や遊び場の減少、携帯電話やテレビゲームの普及が、子どもから身体運動の機会を奪った。

子どもの運動能力向上を目指すためには遊び場の確保も重要ではあるが、現在、子どもの運動に関する研究では幼児期から継続して運動を楽しむよう、運動に自発的に関わろうとする態度を育てるためにはどうしたらよいか大きな課題となっている。

幼稚園教育指導要領⁴⁾では、保育内容「健康」のねらいのひとつに自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとするという項目がある。体を十分に動かすことは、健康な体を育てるために欠くことのできないものである。幼児は本来、自分の体を丈夫に育てることを、みずから行うものであり、大人にさせられる運動は幼児の体づくりに適切なものではない。すなわち、みずから積極的に運動に取り組む幼児を育てることが必要であり、そのような意欲を持つ幼児に育つことの必要性を掲げている。

杉原⁵⁾は「運動するかしないかは動機づけによって決まるという意味で、動機づけは運動行動の最も重要な要因と言える」と述べているが、ここでいう動機づけとは内発的動機づけであり、行動の中に報酬が内在するものである。

内発的動機づけについては、ホワイト(White,R.W)⁶⁾が、環境を思い通りに変えたり操作したりできるという効力感が内発的動機づけの中核であると主張している。学習に対して成功経験や肯定的評価が与えられると子どもは学習についての有能感を発達させるが、失敗経験や否定的評価が与えられると学習についての有能感が疎外され、無力感を強めてしまう。運動嫌いや体育嫌いはこのようにして作られる場合が多いと述べている。また、すべての子どもの運動参加を、内発的に動機づけるために必要な要素の一つである有能感は、単に他との比較競争の結果としての優越感ではなく、できないことをできるようになりたい。もっと上手にできるようになりたい。という動機によって運動に参加し、その結果得られた達成感が、新たな技にチャレンジしてみようという気持ちにさせること、その連続的な心の状況であるとも述べている。

そしてデシ(Deci,E.L.)⁷⁾はホワイトのいう有能感に焦点を当て、内発的に動機付けられた行動とは、有能で自己決定的であることを感知したいという人の欲求に動機付けられた行動であると述べている。

この有能感を幼児で測定するためにハーターとパイク(Harter and Pike)⁸⁾は絵を用いて表した年少児用有能感及び社会的受容の尺度を作成し測定したところ、言語理解、言語表現、注意力などが構成成分の認知的有能感と身体的形態や運動能力などが構成成分の身体的有能感、そして仲間や母親からの受容感の因子に分かれた。日本においてもこの尺度を原尺度として、桜井と杉原⁹⁾が幼児(年長児)の有能感と社会的受容感の尺度を作成および測定し、一般的有能感因子(学習面、運動面の有能感)と社会的受容感因子(仲間、母親からの受容感)が抽出されるにいたった。また、岡沢哲子¹⁰⁾も幼稚園の運動遊び場面に限定した幼児の有能感テストを作成し実施したところ、運動の有能感因子と運動の受容感因子の2因子に分かれるという結果が得られた。

このように、幼稚園児が内発的動機づけにより運動を行うようになるためには、有能感、受容感が非常に重要であることがわかる。

幼児期の運動に対する有能感は仲間からの受容感と母親からの受容感に支えられるものであると桜井¹¹⁾が述べていることから、ある運動ができると認知するためには仲間や母親という周りの人が「見てくれている」、「ほめてくれる」というように受け止められているということを知ることが必要である。よって幼児期においては受容感を高めることが運動有能感を育て、運動に自発的に関わろうとする態度を養うことにつながる。

幼稚園における運動会は幼児に密着しているものであり、身体的、精神的、社会的発達と、充実感を味わうことをねらいとし、生活の大きな節目で成長の飛躍台にしている。また、日常の保育活動が総合的な形で展開されることが望ましく、あそびや活動を集約して、発達段階にそって種目化することが、幼児の成長を促し高めていくこととなるものである。さらに、幼児期は運動有能感が行動の積極性に影響するため、運動会での経験は運動場面だけではなく、他の生活場面にも影響を及ぼすと考えられる。

幼稚園教育指導要領⁴⁾には運動会の規定等は明示されていないが、行事の指導に関して「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。」とされている。幼児は行事に参加し、楽しみながら、日常の園生活とは異なる環境で体験をす

ることにより、活動意欲の向上や、仲間との交流の拡大をするとともに、新たな生活を広げていくものである。

どの行事も、日常保育の通過点でなくてはならないといわれているが、それは運動会においても同様である。しかし、2学期になって急に練習が始まり、運動会のための保育になってしまうことも少なくない。一定の期間、集中的にひとつの活動に取り組むのは効果的であるが、幼児の興味や関心はその活動に常に向いていて、活動する毎に意欲が高まらなくてはならない。子どもの関心が無いにも関わらず、同じことを繰り返すのは強要以外の何物でもない。幼児にとって意欲的に運動会を行うため、そしてその後の幼稚園での活動が活発に行われるためには、保護者や保育者らが幼児と向き合い、幼児が運動会の取り組みにおいて、練習や運動会当日という特別な環境で周囲から受容されていると感じることが非常に重要なことと考えられる。

そこで本研究では、運動会における受容感の認知が、運動会後の運動場面において、運動遊びを活発に行なうことにつながるかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

吉田ら¹²⁾の使用した担任による園児の園における運動場面での行動評定(自己主張・自己実現・自己抑制・運動の積極性・運動の消極性・向社会的行動に関する項目を収集した48項目で構成される)のうち、運動の積極性、運動の消極性に関する項目に、「1人で運動遊びをする」、「複数で運動遊びをする」の2項目を加えた11項目のもので運動会前に担任の先生による年長児の園における運動場面での行動評定を5段階で行ってもらった。

次に岡沢¹⁰⁾が作成した有能感尺度の受容感項目に準拠し、運動会における「参加」、「受容」、「賞賛」、「励まし」の項目になるよう若干の変更を加え、親からの受容感を追加した12項目の受容感テストにより、運動会終了後、年長児に対して個人面接法で調査した。調査は、1枚の絵カードの上下に描かれた2つの絵のうち、あてはまる方を選択させ、その後選択した絵の下に描かれている円により、その程度を選択する2回2件法で受容感を4段階評価した。絵カードは男児用と女児用を用意して、年長児がイメージしやすいようにし、検査者によって大幅な言葉の変化が無いよう絵カードの裏側に質問時の言葉を印刷した。また、対象園の保育時間中に調査を実施したため、保育活動に支障がないよう、活動で使用していない部屋を面接調査会場に設定し、一度に6人ずつ入れ替わりで行った。検査者は幼稚園実習を終え、保育援助の経験がある専門学校の保育福祉科の学生6名であり、事前に調査方法の練習を行った。

さらに運動会から約1ヵ月後に、運動会前と同様の担

任による年長児の運動場面での行動評定を行ってもらいと同時に、運動会の取り組みにおける援助に対する配慮やクラスの様子についてのアンケートに協力いただいた。

受容感テストの結果より、その得点の高かった年長児から順に上(4.00~3.83)、中(3.75~3.42)、下位群(3.33~2.33)の3群(n/3)に分け、受容感による差を明確にするため中位群を除いた上位群、下位群の2群で担任の先生による年長児の運動場面での行動評定を運動会前後で比較検討を行った。項目⑥「運動遊びを避けようとする」、⑦「ちょっと失敗したりうまくいかなかったりすると、すぐ諦めてしまう」、⑧「少しスリルのある運動をさせようとする」と怖がる」、⑩「少し難しいことをさせようとする」と「できない」と言ったりしり込みしたりする」については逆転項目のため、得点を反転して分析を行うこととする。

データの分析にはMicrosoft Office Excel、SPSS 11.0J for Windowsを使用した。

対象園である仙台市内のY幼稚園は調和のある人間となるための土台作りをモットーとしている。緑あふれる広い園庭には巨大滑り台とダンボール滑り場、道路や横断歩道まで描いてある本格的な自転車練習場をはじめ、身体を存分に動かせるような工夫がされており、園児が創造力をはたかせ、遊びを発展させることができる環境である。行事に関しては、大人が考えた行事の参加型ではなく、子どもと計画し、問題点をクリアしながら最後まで責任をもった充実した活動を意図している。また、園や家庭で日常的に経験出来ないことを実施し、個人の楽しみと同時に仲間と協力し、充実出来る体験を目指している。

対象は、Y幼稚園年長児男女101名(男児57名、女児44名)中、面接調査時の欠席児、質問項目の欠損の無い74名(男児40名、女児34名)の受容感テストの結果上位群25名、下位群24名、および年長クラス担任4名である。

調査期間

運動会前の担任による年長児の行動評定

2006年9月11日~9月15日

Y幼稚園運動会

2006年10月7日天候：晴れ

年長児に対する面接調査

2006年10月16日

運動会後の担任による年長児の行動評定

2006年11月13日~11月17日

年長児に対する受容感テストは、岡沢¹⁰⁾が作成した有能感尺度の受容感項目に準拠し、運動会における「参加」、「受容」、「賞賛」、「励まし」の項目になるよう若干

の変更を加えた。また、幼児期の運動に対する有能感
仲間からの受容感と母親からの受容感に支えられるもの
であるという桜井¹¹⁾の報告をもとに親からの受容感を
追加した計12項目を採用した。

質問①「リレーの走る順番を、友だちと一緒に話し合
えたか。(参加)」については、対象園の年長組において、
9月中から運動会でどんな競技を行いたい話し合いが
もたれており、自分たちで決めた種目であるリレーにつ
いても「どうしたらスムーズにバトンパスができるか」、
「走る順番はどうするか」など、積極的に仲間と相談し
ていたようなのでこの質問を採用した。

年長児に対する受容感テスト

質問項目
仲間からの受容感
①リレーの走る順番を、友だちと一緒に話し合 えたか。(参加)
②運動会の練習で上手にできなかったとき、友だ ちは教えてくれたか。(受容)
③運動会のとき、自分が上手にできたとき友だち はほめてくれたか。(賞賛)
④運動会のとき、友だちは頑張れと言ってくれた か。(励まし)
親からの受容感
⑤運動会の練習で、お母さんは一緒に練習してく れたか。(参加)
⑥運動会のとき、お母さんはよく話を聞いてくれ たか。(受容)
⑦運動会のとき、お母さんは褒めてくれたか。(賞 賛)
⑧運動会のとき、お母さんは頑張れと言ってくれ たか。(励まし)
担任の先生からの受容感
⑨運動会の練習で、担任の先生と一緒に練習して くれたか。(参加)
⑩運動会のとき、担任の先生はよく話を聞いてく れたか。(受容)
⑪運動会のとき、担任の先生は褒めてくれたか。 (賞賛)
⑫運動会のとき、担任の先生は頑張れと言ってく れたか。(励まし)

担任による年長児の運動場面における行動評定につ
いては、吉田ら¹²⁾の使用した担任による園児の園にお
ける運動場面での行動評定(自己主張・自己実現・自己抑制・
運動の積極性・運動の消極性・向社会的行動に関する項
目を収集した48項目で構成される)のうち、運動の積

極性、運動の消極性に関する9項目を抜き出した。

また、受容感が高まると仲間といることに安心感をお
ぼえ、集団遊びをする機会が増えるのではないかという
仮定もと「1人で運動遊びをする」、「複数で運動遊びを
する」の2項目を加えた。

担任による年長児の運動場面における行動評定

評定項目
①身体を活発に動かして遊ぶ
②1人で運動遊びをする
③いろいろな運動遊びに進んで取り組む
④自由遊びのときは、運動遊びをする
⑤複数で運動遊びをする
⑥運動遊びを避けようとする
⑦ちょっと失敗したりうまくいかなかったりする と、すぐ諦めてしまう
⑧少しスリルのある運動をさせようとする怖がる
⑨得意になって運動遊びをする
⑩運動遊びのときは、うまいので良く目立つ
⑪少し難しいことをさせようとする「できない」 と言ったりしり込みしたりする

(項目⑥、⑦、⑧、⑪は逆転項目)

Ⅲ. 結果

運動会後に面接調査した受容感テストの結果を図1に
示した。岡沢¹⁰⁾の尺度での結果では、項目平均は2.80
～3.44の範囲にあった。また、桜井ら⁹⁾の研究では
2.4～3.5の範囲にあり、幼児は受容感を高く評価する
傾向がみられた。本研究では2.50～3.87と上記尺度
よりもやや広範囲ではあるが、受容感を高く評価する傾
向は似ている。また、受容感テストの上位群と下位群の
比較を図2に示した。上位群は3.92～4.00とほぼ満
点であり、下位群においては1.50～3.58と上位群に
比べ、項目によりばらつきがあった。この2群でt検定
を行った結果、受容感テストの評価の値には全ての質問
項目において5%水準で有意に差があることが認められ
た。

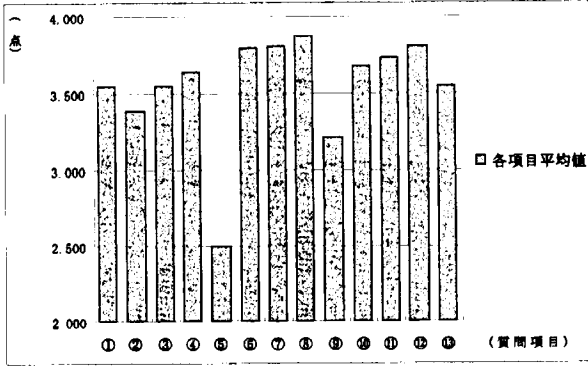


図1. 受容感テスト結果

※⑬は全項目平均値

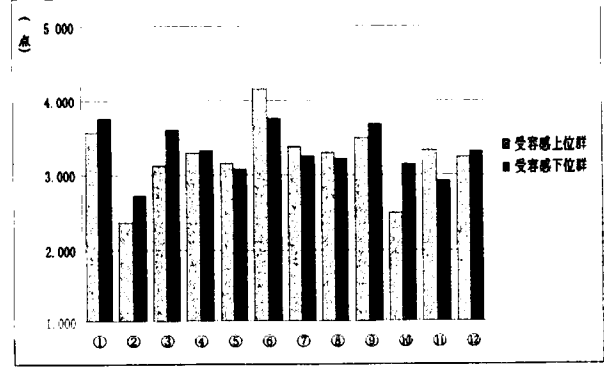


図3. 運動会前の行動評定の受容感上位群・下位群の比較

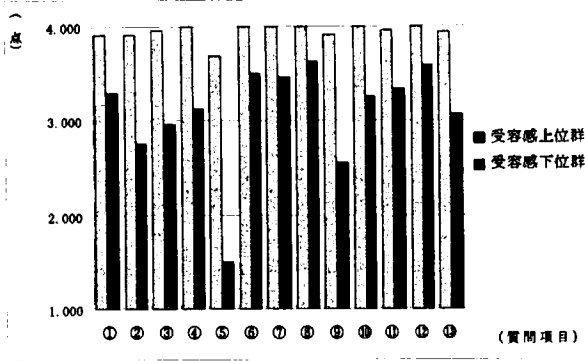


図2 受容感上位群・下位群の質問項目別平均

※⑬は全項目平均値

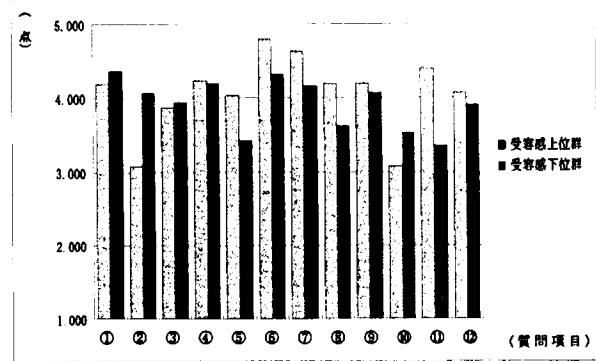


図4 運動会後の行動評定の受容感上位群・下位群の比較

担任による運動場面での行動評定の受容感上位群、下位群の比較を運動会前、運動会後にわけ、それぞれ図3、図4に示した。運動会前においては、受容感上位群、下位群の全ての項目においてt検定を行ったが、表1に示したように行動評定に有意な差は見られなかった。運動会後においては、項目②「1人で運動遊びをする」、項目⑤「複数で運動遊びをする」、項目⑥「運動遊びを避けようとする」、項目⑦「ちょっと失敗したりうまくいかなかったりすると、すぐ諦めてしまう」、項目⑪「少し難しいことをさせようとする」「できない」と言ったりしり込みしたりする」において、表2に示したように5%水準で有意な差があった。また、全項目平均値は運動会前の受容感上位群では3.233、受容感下位群では3.307、また運動会後の全項目平均値は受容感上位群では4.065、受容感下位群では3.922となった。全項目平均値についてもt検定を行ったが、表3のように運動会前、運動会後とも、有意な差はなかった。

表1 運動会前の行動評定における受容感上位群・下位群のt検定

項目	等分散性のための Levene の検定	2つの母平均の差の検定			
		F 値	有意確率	t 値	有意確率 (両側)
①	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	0.009	0.924	-0.698	0.489
				-0.697	0.489
②	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	1.538	0.221	-1.091	0.281
				-0.697	0.489
③	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	2.074	0.156	-1.893	0.065
				-1.886	0.066
④	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	1.847	0.181	-0.201	0.841
				-0.200	0.842
⑤	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	1.584	0.214	0.257	0.798
				0.256	0.799
⑥	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	0.052	0.821	1.340	0.187
				1.338	0.187
⑦	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	0.108	0.744	0.416	0.679
				0.416	0.680
⑧	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	0.756	0.389	0.220	0.827
				0.221	0.826
⑨	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	0.004	0.952	-0.601	0.551
				-0.601	0.551
⑩	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	1.173	0.284	-1.865	0.068
				-1.868	0.068
⑪	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	0.571	0.453	1.326	0.191
				1.320	0.194

(*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001)

表2 運動会後の行動評定における受容感上位群・下位群のt検定

項目	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
	F 値	有意確率	t 値	有意確率 (両側)	
①	等分散を仮定する。	0.411	0.524	-0.948	0.348
	等分散を仮定しない。			-0.948	0.348
②	等分散を仮定する。	0.700	0.407	-3.169	0.003**
	等分散を仮定しない。			-3.175	0.003**
③	等分散を仮定する。	0.519	0.475	-0.424	0.673
	等分散を仮定しない。			-0.425	0.673
④	等分散を仮定する。	3.592	0.064	0.148	0.883
	等分散を仮定しない。			0.148	0.883
⑤	等分散を仮定する。	0.124	0.726	2.611	0.012*
	等分散を仮定しない。			2.619	0.012*
⑥	等分散を仮定する。	3.772	0.058	2.318	0.025*
	等分散を仮定しない。			2.294	0.028*
⑦	等分散を仮定する。	0.900	0.348	2.182	0.034*
	等分散を仮定しない。			2.161	0.037*
⑧	等分散を仮定する。	0.518	0.475	1.999	0.051
	等分散を仮定しない。			1.991	0.053
⑨	等分散を仮定する。	1.930	0.171	0.455	0.651
	等分散を仮定しない。			0.455	0.651
⑩	等分散を仮定する。	1.029	0.316	-1.196	0.238
	等分散を仮定しない。			-1.200	0.236
⑪	等分散を仮定する。	0.466	0.498	4.009	0.000***
	等分散を仮定しない。			3.995	0.000***

(*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001)

表3 運動会後の行動評定の全項目平均値における受容感上位群・下位群のt検定

項目	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
	F 値	有意確率	t 値	有意確率 (両側)	
運動会前	等分散を仮定する。	0.855	0.360	-0.439	0.663
	等分散を仮定しない。			-0.437	0.664
運動会後	等分散を仮定する。	0.174	0.679	0.757	0.453
	等分散を仮定しない。			0.756	0.454

(*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001)

担任による運動会前後の行動評定の上昇量を図5に示した。項目②「1人で運動遊びをする」のみ受容感下位群の上昇量が多いが、それ以外の項目は全て受容感上位群の上昇量が多いという結果が得られた。項目⑫「全項目平均値」は受容感上位群で0.833、受容感下位群では0.615となった。また、運動会前後の担任による園児の行動評定の変化についてt検定を行ったところ、表4のように上位群では項目①、③、④、⑤、⑦、⑧、⑨、⑪、においては0.1%水準で有意に上昇しており、項目②、

⑥、⑩においては1%水準で有意に上昇したことが認められた。さらに表5のように下位群では、項目⑥「複数で運動遊びをする」以外10項目において5%水準以上で有意に上昇した。

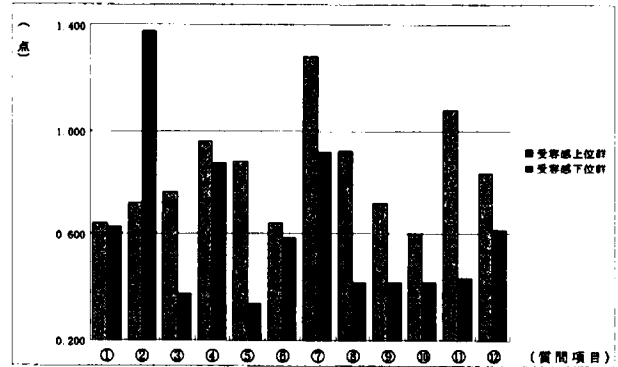


図5. 担任による運動会前後の行動評定の上昇量
※⑫は全項目平均値

表4 受容感上位群の運動会前後における行動評定のt検定

	平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	t 値	有意確率 (両側)
項目①前 -	-0.640	0.757	0.151	-4.226	0.000
項目①後					
項目②前 -	-0.720	1.242	0.248	-2.898	0.008
項目②後					
項目③前 -	-0.760	0.879	0.176	-4.321	0.000
項目③後					
項目④前 -	-0.960	0.790	0.158	-6.080	0.000
項目④後					
項目⑤前 -	-0.840	0.898	0.180	-4.676	0.000
項目⑤後					
項目⑥前 -	-0.640	1.114	0.223	-2.874	0.008
項目⑥後					
項目⑦前 -	-1.280	0.737	0.147	-8.683	0.000
項目⑦後					
項目⑧前 -	-0.920	0.862	0.172	-5.335	0.000
項目⑧後					
項目⑨前 -	-0.720	0.843	0.169	-4.272	0.000
項目⑨後					
項目⑩前 -	-0.600	0.913	0.183	-3.286	0.003
項目⑩後					
項目⑪前 -	-1.080	0.954	0.191	-5.661	0.000
項目⑪後					

(*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001)

表5 受容感下位群の運動会前後における行動評定のt検定

	平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差	t 値	有意確率 (両側)
項目①前 -	-0.625	0.924	0.189	-3.315	0.003
項目①後					
項目②前 -	-1.375	1.013	0.207	-6.646	0.000
項目②後					

項目③前 - 項目③後	-0.375	0.770	0.157	-2.387	0.026 *
項目④前 - 項目④後	-0.875	0.850	0.174	-5.042	0.000 ***
項目⑤前 - 項目⑤後	-0.333	0.917	0.187	-1.781	0.088
項目⑥前 - 項目⑥後	-0.583	0.881	0.180	-3.245	0.004 **
項目⑦前 - 項目⑦後	-0.917	0.974	0.199	-4.609	0.000 ***
項目⑧前 - 項目⑧後	-0.417	0.776	0.158	-2.632	0.015 **
項目⑨前 - 項目⑨後	-0.417	0.654	0.133	-3.122	0.005 **
項目⑩前 - 項目⑩後	-0.417	0.504	0.103	-4.053	0.000 ***
項目⑪前 - 項目⑪後	-0.458	0.658	0.134	-3.412	0.002 **

(*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001)

IV. 考察

受容感テストの項目平均は項目⑤「運動会の練習で、お父さん、お母さんは一緒に練習してくれたか。(参加)」が2.500と3.000を割った以外は全ての項目において3.000以上を示し、幼児は受容感について肯定的な判断をしていることが示唆された。本研究では運動会の関わりに限定した受容感テストであるため、一概に比較することは難しいが、この結果は桜井ら⁹⁾の先行研究と同じ傾向であるといえる。

また、桜井ら⁹⁾は幼児が受容感を小学生以上の年代よりも高く評価する要因として、幼児は発達の初期にあり、周囲の者があまり高度なことを要求しないため、自分の行動を否定されるような失敗経験が少ないことをあげている。本研究の対象園では、保育者が「どんな結果であれ最後まで一生懸命頑張ろう」と運動技能よりも一人ひとりの頑張りを認める言葉がけを意識して、運動会の練習や当日においても幼児たちと関わっていた。このことが幼児にとっては「できる」「できない」で判断されているのではなく、「自分がどれだけ一生懸命やっているかを先生は見てくれているんだ」「失敗することがだめなことではないんだ」と考えるようになり、全体的に受容感を肯定的にとらえたのではないかと考えられる。

また、表4のように受容感上位群は全項目において行動評価が有意に上昇した。このことは、運動会の取り組みにおいて幼児が受容感を認知することが、その後の運動場面で活発に活動することにつながるといえる。また、項目⑥「複数で運動遊びをする」は受容感下位群では有意に上昇せず、上位群のみ有意に上昇したことは事前の予想通りであった。

受容感上位群で全ての行動評定が有意に高まった要因として、園児同士できない事を教え合って運動会当日に成功できたことや、親が家庭でわが子と向き合い一緒に練習したこと、担任が何とかできるようにしてあげたいという思いでそれぞれの園児に関わったこと、そして当日に周りから自分の頑張りを認められたことがあげられる。つまり「周りの人が自分と一緒に練習してくれた」「運動会のときに周りの人が自分を見てくれた」という受け止められたという思いや認められたという思いが高まったことにより、運動会後の運動遊びが活発になり担任の行動評定に反映されたと考えられる。

また、運動会前後の担任による行動評定の全項目平均のt検定において受容感上位群、下位群の間には有意な差は無かったことから、担任の幼児に対する行動評定と運動会における幼児の受容感の認知には関連が無いことが示唆された。岡澤ら¹³⁾の研究では、もともと受容感の高かった群が運動会後に低下したとの報告があった。その理由として、運動ができる幼児は保育者が運動の苦手な幼児に援助することが多くなることで「今までよりもかまってもらっていない」、「誰々よりはかまってもらっていない」と感じたのではないかとしている。本研究でも同じことがいえるのではないだろうか。対象園では、運動会の練習および当日において運動のできる幼児よりも運動の苦手な幼児に対する援助が比較的多くなったため、担任の行動評価は高いが受容感の低い幼児が下位群に含まれることになったからと考えられる。また、運動が苦手な幼児に対して親は運動に自信を持ってもらいたいという願望から、運動ができていなくてもその子なりによくやると受容的態度で関わっていたのではないかと推察される。このことが担任の行動評定は低いを受容感が高くなったため上位群に含まれる結果につながったのであろう。したがって上位群と下位群の担任の幼児に対する行動評定に明確な差が無かったといえる。

一方、受容感下位群においては上位群にはおおよばないものの、項目⑥「複数で運動遊びをする」以外の項目全てが有意に上昇した。この要因として2節でも述べたように、運動のできる幼児が下位群に含まれていたことがあげられる。そのため担任の行動評定が運動のできない幼児との相対評価となり高まってしまった可能性が高い。この点に関しては事前に注意していただいたものの今後検討しなければならぬ課題である。

また、項目②「1人で運動遊びをする」が上位群よりも有意に上昇したことについて考察する。運動会の関わりにおいて受容感テストの質問②「運動会の練習で上手にできなかったとき、友だちは教えてくれたか。(受容)」と質問⑪「運動会のとき、担任の先生は褒めてくれたか。(賞賛)」は項目②「1人で運動遊びをする」との相関関係

数が5%水準で有意であった。そのためこの2項目を上位群より0.1%水準で有意に低く認知していることから、運動会後の運動場面において、「みんなで遊んでいるときに失敗したらどうしよう」「できなかつたらみんなから馬鹿にされるのではないか」「どうせ先生には褒められない」というような負の感情が強くなり、1人で運動遊びをする姿が多く見られたと同時に、項目⑥「複数で運動遊びをする」が有意に上昇しなかったのであろう。

V. 結論

運動会は、日頃の身体活動の結果としての発表の場や、その後の活動のきっかけという形で実行すべきである。しかし現状は、運動会のために練習した遊戯や鼓笛などの特殊技能の発表、園の宣伝や来年度入園予定児へのサービスといった目的が中心の幼稚園が多い。数々の行事に追われた園での生活の中で運動会を実施するために、日常保育のプロセスの大切さよりも、運動会当日の結果を重視した内容になってしまうのは仕方ないことなのかもしれない。しかし、保育者は運動会を単なるショーとしてとらえるのではなく、幼児が日々の日常保育の中で経験したことを、自信を持って発揮できる方法をともに考えるべきである。

また、運動会は日常の運動遊びが盛り込まれているだけに、保護者も我が子が成長していく過程をうかがい知ることができる。保護者、保育者も立場的は異なるものの、共に成長を望んでいるのである。そして幼児も自分の一生懸命に頑張る姿を見せることに充実感を感じているはずである。

本研究では、運動会という普段と異なった舞台上で一生懸命にやったことを周りからよりよく受容され、それを認知することで幼児は運動会后、活発に運動遊びをすることが示唆されたが、具体的援助についてまで示すことはできなかった。また、運動に対する有能感が周りからの受容感に支えられる幼児期においては、運動会などの日常とは異なる場面のみならず、日常の保育場面から幼児一人ひとりが受容感を高められるような個々に応じた声かけなどの援助が必要となるだろう。このことをふまえ、日常の保育場面における幼児の受容感の認知の影響を明らかにし、具体的な援助を考えていくことが今後の課題であろう。

幼児の運動能力向上を目指すためには、みずから積極的に運動に取り組む幼児を育てることが不可欠である。そのために保護者や教師は運動の結果のみならず、運動に取り組んだ過程にも注目し、受容する必要がある。また幼稚園の活動においても幼児同士が受容しあえる環境づくりを考えていくべきであろう。

受容感は保護者、教師、仲間などの働きかけによって

変化させることが可能である。幼児が受容感を認知し、積極的に運動する環境づくりに期待して本研究の結びとする。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 (2006)、平成17年度体力・運動能力調査報告書
- 2) 杉原隆・森司朗・吉田伊津美 (2004)、幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力に関与する環境要因の構造的分析. 平成14～15年度文部科学省科学研究補助金(基礎研究B)研究成果報告書
- 3) 杉原隆・森司朗・吉田伊津美・近藤充夫 (2004)、2002年の全国調査から見た幼児の運動能力. 体育の科学 54 (2) pp161-170
- 4) 文部科学省 (1999) 幼稚園教育指導要領解説フレーベル館
- 5) 杉原隆 (2003) 運動指導の心理学運動学習とモチベーションからの接近. 大修館書店
- 6) White, R. W. (1959) Motivation reconsidered: The concept of self-conceptence. Psychological Review, 66 pp297-333
- 7) エドワードL. デシ:安藤延男・石田梅男訳 (1980) 内発的動機づけ一実験社会心理学的アプローチ誠信書房
- 8) Harter, S. and Pike, R. (1984) The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. Child Development, 55 pp1968-1982
- 9) 桜井茂男・杉原一昭 (1985)、幼児の有能感と社会的受容感の測定. 教育心理学研究第33巻第3号 pp53-58
- 10) 岡沢哲子 (1996)、幼稚園の運動遊び場面における有能感テストの作成. スポーツ教育学研究 Vol. 16, No 1, pp. 63-72
- 11) 桜井茂男 (1997) 学習意欲の心理学自ら学ぶ子どもを育てる誠心書房
- 12) 吉田伊津美・杉原隆 (2002)、幼児の運動遊びが有能感および園での行動に及ぼす影響に関する因果モデルの検討. 保育学研究第40巻第1号 pp.91-99
- 13) 岡沢哲子・土屋明子 (2002)、運動会が幼児の運動場面における有能感に及ぼす影響. 甲子園短期大学紀要No 21pp35-45